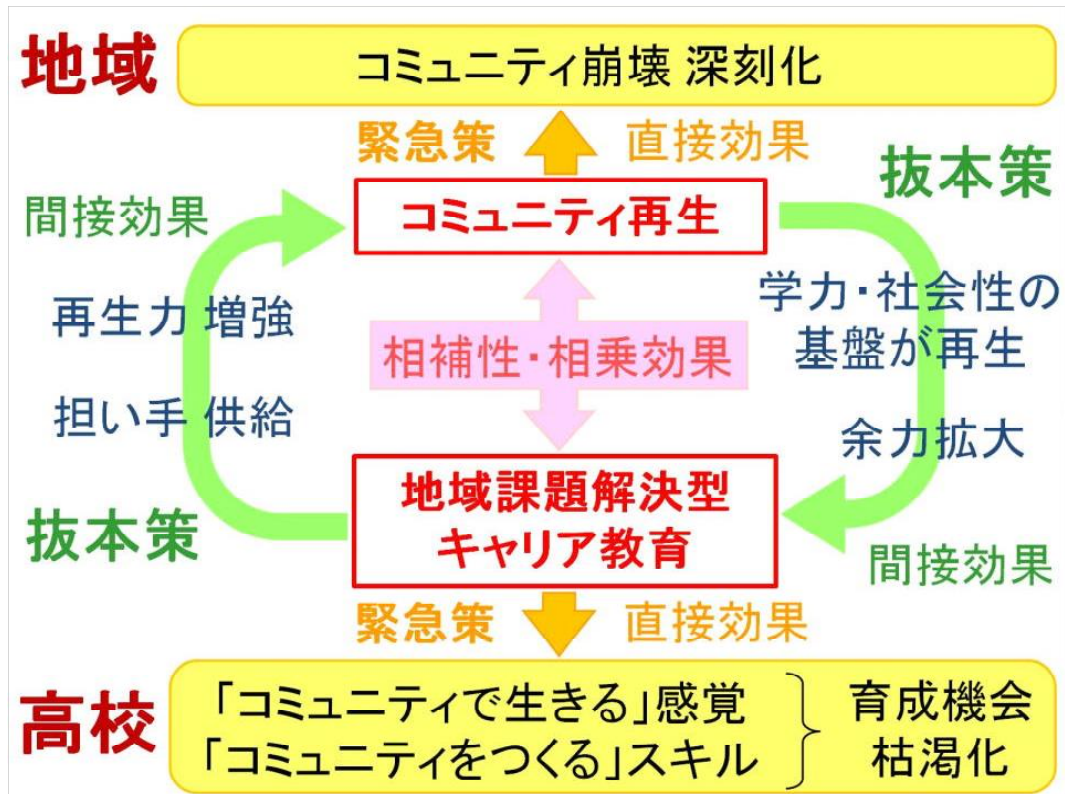


中央教育審議会 第6回 学校地域協働部会 意見発表

学校と地域の連携・協働による教育活動を通じた 地域振興・再生の在り方について



岐阜県立可児高等学校

浦崎 太郎

平成27年 8月 25日 (火)

於 文部科学省 (東京都千代田区)

意見発表

学校と地域の連携・協働による教育活動を通じた地域振興・再生の在り方について

浦崎 太郎

(岐阜県立可児高等学校教諭)

① 岐阜県可児市における協働事例

- 今夏、可児市や地元の市民団体が求めるボランティアや、地元の諸機関・諸団体等が社会教育の場として用意した「大人と高校生と一緒に地域課題の解決策を探る多様かつ小規模な場」に対して、県立可児高校の1年生全員および2～3年生の希望者が何れか1つ以上を選択して参加する、という協働体制が確立した。
- ・ 岐阜県教育委員会は、グローバル化や少子高齢化等の急速な社会情勢の変化に対応した高校改革を推進するために「県立高校改革リーディングプロジェクト推進事業」(平成25～27年度)を立ち上げ、この事業に可児高校も参加することとなった。
- ・ 事業の一環として「地域課題解決型キャリア教育を通して、学力向上・キャリア保障・地域再生を一体的にすすめることはできないか？」と可児高校から地域に発信したところ、可児市職員有志を介し、議会改革に熱心な可児市議会に伝わった。
- ・ 可児市議会は「地域課題解決型キャリア教育を推進する」意思を固め、高校生を地域の担い手として育成する社会教育事業を主催(高校生議会等)あるいは支援するため、強力なスポンサーシップを発揮しつつ、高校と地元諸機関・諸団体のコーディネートすすめた。すなわち、可児市議会が地域力を結集する上で中心的な役割を果たした。
- ・ 高校生と関わる大人の多様性や人数を確保したり、それだけの団体や個人と細かい調整を進めたり、といった実務は学校も議会も担い得ない。そこで、関係者から推挙された適任者を核に、コーディネートの実務を担う組織(NPO縁塾[※])を設立する運びとなり、以後、NPO縁塾をハブとして人的ネットワークの構築が急速に進んだ。 ※ 今年度中のNPO法人化にむけて申請準備中
- ・ その成果として、今夏、地域の様々な課題について「解決にむけて尽力する講師から、地元住民と高校生と一緒に学び、一緒に解決策を探る」学びの場(社会教育)が数多く実現。可児高校から、1年生全員および2～3年生の希望者が、何れか1つ以上を選択して参加した。(…「夏の！OPEN エンリッチ・プロジェクト 2015」)



高校生議会 「子育て支援」に関する意見交流



夏の！OPEN エンリッチ・プロジェクト 「行政クロスロード」・・・可児市職員

- ・ それに加え、キッズクラブ(学童保育)、外国籍の小中学生に対する学習支援、「子育て応援フェスタ」等、可児市や地元諸団体が企画運営する事業に対して、該当分野を志望する可児高生が数多くボランティア参加するようになった。また、可児市主催のシンポジウム等で可児高生が登壇する機会も増加した。
- ・ 大人と一緒に地域課題の解決策を探る学びの場は、課題解決に対する直接的な貢献度は低いものの、「地域課題に対する理解度や当事者意識が高い市民の育成」あるいは「難度の高い地域課題の解決に必要な高い実力を大学等で身につけて帰郷する専門家の育成」という面で、間違いなく、足腰の強い地域づくりにむけた先行投資として機能すると期待されている。
- ・ また、キッズクラブ等のボランティアでは、将来を展望する体験を積みながら、子育て支援の現場における人手不足という地域課題の解決にも貢献するという互惠関係を構築できた。すなわち、学びの場を主体として地域の課題解決や地域づくりを推進するモデルを形成できた。

② 高校と地域が関わりをもつメリット

生徒のメリット

- ・ 社会に出ていく不安感が軽減され、むしろ、社会に出て活躍する意欲が増す。
- ・ リアルな素材で体験できるため、いま求められている、課題発見&解決能力が高まる。
- ・ 「地元が」生きていくため、そして「地元で」生きていくために習得すべき力を正確に知ることができるため、進路選択がよりの確になるとともに、それに必要な力を身につけて帰郷できる可能性が向上する。

高校のメリット

- ・ 生徒の学習意欲やキャリア意識が向上し、本来業務に専念でき、負担が軽減される。
- ・ 生徒が「地域で」学ぶことができれば、すなわち社会教育の場に高校から生徒を送り込む仕組みを構築できれば、キャリア教育の企画や運営に要する高校の負担は激減する。
- ・ 課題発見・解決能力を育成する場を確保でき、入試改革にも対応できる(=後述)。

地域のメリット

- ・ 先入観や固定観念のない発言により、課題解決に突破口を与えることが珍しくない。
- ・ 特に医療福祉等の分野では、向学心を高めて進学した若者が5～6年後に地元事情を熟知した即戦力として地元に戻ってくる可能性が高まる。すなわち、投資的価値が高まる。
- ・ それ以外にも、中長期的にみて、地元の将来に対する当事者意識や、「地元が／地元で」生きていく力を高めて帰郷する率が向上し、地域の持続可能性が向上する。
- ・ 行政事業や、高齢化が進みがちな地域活動や市民活動に若い力を吸収する機会が増える。
- ・ 教育環境の高さに魅力を感じて移住する世帯が増え、やはり地域の持続可能性向上に貢献する。(…既に「移住を検討したい」の声あり)

③ 探究やアクティブラーニングとの関連性

- ・ そもそも、アクティブラーニング(AL)が必要になった背景には、「知識のストック」に価値があった時代から、異質協働による「知識の絶えざる生産」が必要な時代への移行がある。

高校で授業をAL化する本質的な限界

○ そもそも、ALが必要になった背景は…

「知識のストック」に価値があった時代から、
「知識の絶えざる生産」が必要な時代への移行
(未知な新システムの創造 = 知識群の統合)

○ ALが高校の教科・科目になじまない点(限界)

「学問体系に基づき細分化」「因果関係が確定」
「確実に習得するだけでも膨大な時間が必要」
(ALの表層的な導入は、さらなる混乱の元に)
行き詰まりの原因は？ 活路は何処に？

ALの構造的な限界と合理的な導入法

○ ALの導入…活路の発見を阻んでいる先入観
「子供や若者が学ぶべきこと」
= 「学校で・教員が教えるべきこと」

↓ 高校と地域をセットで俯瞰すると活路が見える

○ ALの望ましい導入法(生涯学習的観点の導入)

「地域のリアルな課題解決にALを導入する。」

- ・ 高校生も参加 → 地域の担い手育成にも有効
- ・ 高校では、そこにつながる教科指導を実践

学校教育でALの全てを引き受けると破綻する。

- ・ 半面、「AL型授業の導入」には構造的な限界があり、ALの表層的な導入が高校にさらなる疲弊や混乱をもたらすことは必至である。それは高校の科目が、たとえ総合化への流れがあるにせよ、学問体系に基づいて細分化され、因果関係が既知であるほか、確実に習得するだけでも膨大な時間を必要とするからである。
- ・ すなわち、ある種の固定観念や旧来的な手続により、ALの導入に関する議論は、いつしか「学校で・教師が行うべきもの」という局所化された前提で議論が進んでおり、このままでは十分な効果を期待しえないばかりか、学校にさらなる疲弊や混乱をもたらす懸念性が極めて高い。
- ・ ALの実効性を高め、大学入試改革等の理念をより高度に実現するためには、地域に視野を広げ、生涯学習的な視点を持ち、「多様な大人が地域のリアルな課題を解決する活動にALを導入し、そこに高校生も参加させる」ことをふまえた上で、高校では「地域課題を解決する活動への接続性を意識したAL型授業を行う」という協働が、ぜひ必要である。
- ・ 実際、上記の活動を経験した可児高生は「正解のない問題に挑戦するのが楽しい」「問題をとりまく多様な関係者が協力しあえば活路は見いだせる」という感覚を持っている。
- ・ 「高校生・学校・地域が揃って活力を回復できるか、揃って疲弊の度を増すかは、高校と地域がALに関して適切な協働を実現できるか否かにかかっている」といえる。
- ・ 「グローバル人材の育成」を本気で考えるなら、その土台として「地域課題解決活動への参加」は必須であり、さらにその土台として「授業のAL化推進」は必須である。

大学入試改革への対応

求められているのは **課題発見・解決能力**

元々「地域が」必要としている力
課題も資源も「地域に」ある
学校で扱うのは 本質的に限界あり

↓

「地域で」学ぶ方が自然

地域に「学びの場」をもたない進学校は、
大学入試改革に対応できない。

キャリア教育の階層性

Global

集団(世界)をみて要素(地域)の生き方を考える

↑ ↓

世界を相手に生きる力をリアルに高める(地域づくり)

Local

集団(社会)をみて要素(個人)の生き方を考える

↑ ↓

実社会で生きる力をリアルに高める(集団活動)

Classroom

キャリア教育の土台は教室でのアクティブラーニング

④ 高校と地方公共団体が連携する重要性

- ・ 良好な地域環境は、児童生徒の学力や社会性が高まるための重要な基盤である。ポイントは、「子供や若者が“集団”との関わり方を体験的に学び、段階的にステップアップできる地域環境を保障できるかどうか」である。今日、教育問題の多くは地域環境の崩壊に起因する。

- また、子供の学力や社会性が向上するかどうかは、かなりの程度、幼い子をもつ母親の孤立感を解消できるコミュニティがあるかどうかにかかっている。



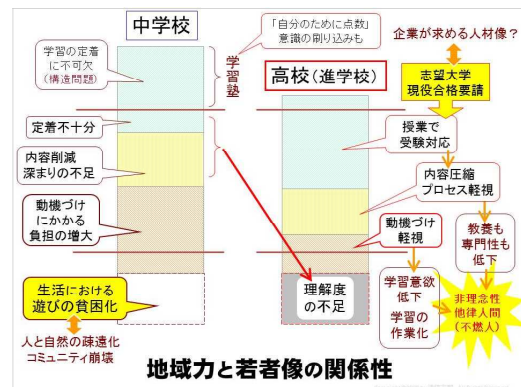
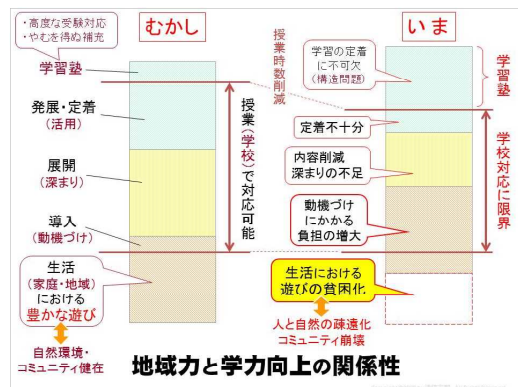
コミュニティ再生と学力向上

小中学校区にコミュニティ再生(大人の関係性回復)

地域に**支えあい**の関係性(セーフティーネット)実現
 幼い子どもをもつ**母親の孤立感が解消し**、安定
 子ども(乳幼児)が**安心し**、安定
 子どもが**幼児集団**へ円滑に親和
 子ども(幼児)に**落ち着き・穏やかさ**
 子どもが**集中力**を身につけて就学
 授業に集中し、**学習課題を達成**

学力向上 この対極が **学力崩壊**

- 昔は、子供に豊かな遊びが保障されていたため、小中学校の授業における動機づけは最小限で済み、授業でじっくり学び深め、定着をはかることが可能だった。対照的に今日は、子供の遊びが貧困化したため、授業で動機づけに膨大な労力を要し、じっくり学び深める時間が奪われ、授業で定着まで進めず、学習塾が必要になってしまった。すなわち、豊かな遊び日常的に体験できる地域環境を子供から奪ったツケを、保護者が学習塾の月謝という形で支払わされるとともに、保護者の所得格差が子弟の教育格差につながる危険性が高まっている訳である。
- また、多くの高校では動機づけに対する配慮が乏しく、加えて受験対策の比率が高いため、じっくり学び深めることが困難である。こうして、学習意欲が低下し、学習が作業化し、十分な基礎学力を身につけないまま大学等に進学する若者が量産される。
- 以上、子供や若者の学力や社会性は、自然環境やコミュニティ等、地域環境の影響を大きく受ける。重要なのは、地域環境の向上に対して教育委員会や学校が果たしうる役割は小さく、むしろ首長部局が関わるべき必然性や必要性の方が大きい。以上、「人づくり」とは、各自が果たすべき役割を正確に理解し、しっかり果たし合うことによって、初めて実現する営みであるといえる

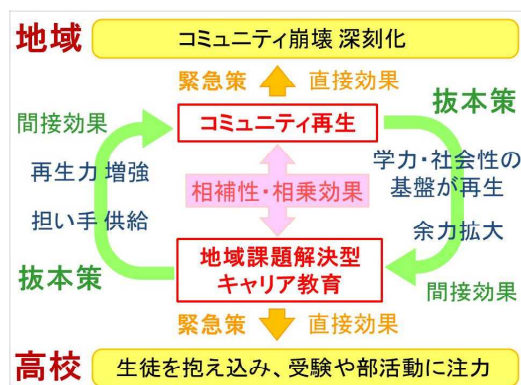
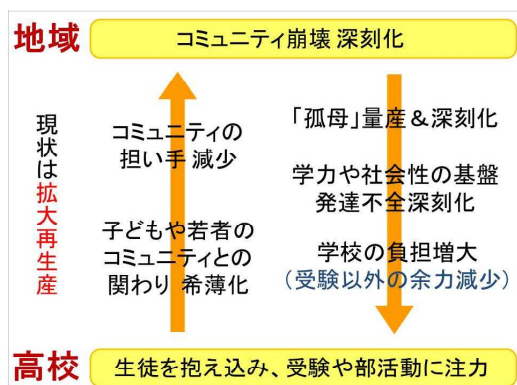


- 次図は、「自ら課題を発見し解決する」態度や能力を備えた若者が育つ過程を示したものである。目前の子供や若者が、図に描かれている幾段階ものステップを高校を卒業する頃までに切り切ることのできる見通しが立てば、私たちは今日的な閉塞感から解放され、明るい将来を描くことができるであろう。
- ここで重要なのは、「一人ひとりに全てのステップを適時に保障しない限り、目標とする若者は育たない」という点である。そして、例えば、いくら「課題発見・解決能力の育成を」とアクティブ・ラーニング等の導入をはかっても(→step.4)、事前に子供や若者が直前の段階まで到達して



いなければ、断片的な施策に終わり、目的を十分に達成できないのは明らかである。

- 一人ひとりに全てのステップを保障しようと思えば、「高校段階までの成長過程を描くこと」や「教育環境の整備や地域課題を解決する活動に関連の深い地方公共団体との協働」は不可欠である、ということができる。
- 今日、地域では「コミュニティの崩壊が深刻化」し、高校では「生徒を抱え込んで受験指導や部活動に注力」しているが、看過できないのは「地域は高校に負担を与え、高校は地域に負担を与える」という悪循環であり、「地域(地方公共団体)と高校は共倒れに向かって疾走している」実態を指摘することができる。
- 地域が衰退する悪循環の進行を回避できなかった一因として、特に高校生段階において「“地域”の将来を担う次世代の一貫的な育成に対する責任の所在が不明瞭だった」点を指摘できる。具体的には、市町村や市町村教委は「(県立)高校生は管轄外」、県教委や高校は「市町村のことは管轄外」と考えた結果、「高校生を市町村等の担い手として育成する」部分に大きな穴ができてしまった訳である。
- いま必要なのは、地域(地方公共団体)は「コミュニティの再生」、高校は「地域課題解決型キャリア教育」という緊急策を講じることにより、各々が直接効果を手にすることである。その際、地域と高校がビジョンを共有すれば、各者の対策が相手に対する抜本策となり、相手に対して間接

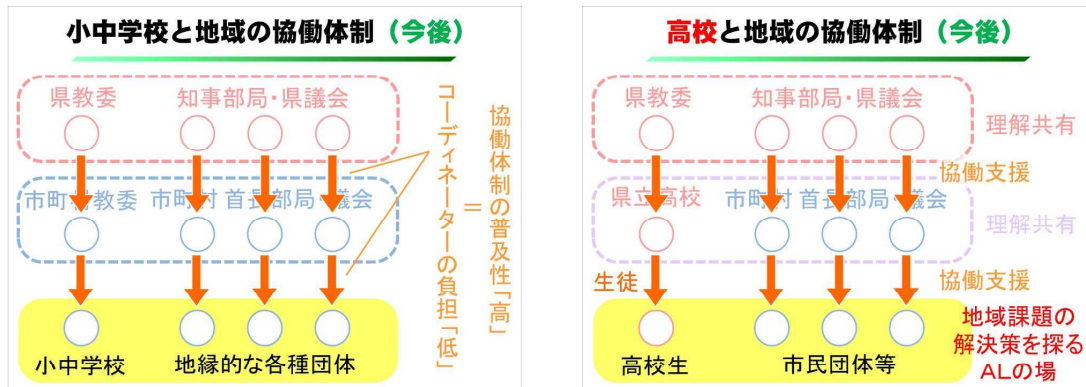


効果を及ぼすことができ、好循環を形成することができる。

- ・ この循環は、人口規模が小さいほど早く確立できるとともに、速く回転させることができ、地域と高校の一体的な再生を加速させる道が開ける。
- ・ 中学校では、地域が享受できる恩恵が分かりにくいほか、連携を通した「学校を核とした地域づくり」効果も限定的である。それに対して、高校では、地域が享受できる恩恵や即効性、連携しない損失を明快かつ説得力をもって伝えることができ、地域の参加や協力を圧倒的に得られやすい。
- ・ 高校の場合、協働するメリットや連携しない損失を伝えることにより、豊富な資源や強力な影響力をもつ地方公共団体等と互惠関係を構築しやすい。
- ・ 加えて、学校教育の基盤となる教育環境(自然環境やコミュニティ)の再生加速や、各小中学校区を単位に構成された諸団体への影響力も期待できる。

⑤ より普及性の高いネットワークの構築手順

- ・ 小中学校レベルで個々に苦闘するより、あえて「高校と地域の協働」を先行する方が、全体像(子供の発達段階や地元への還元効果)が分かり易くなり、あわせて地方公共団体が各方面に対して持っている様々な影響力を借りることもできて、合理的である。さらに、この方がコーディネーターに求められる力量が少なくて済むため、普及性も高い。
- ・ 人口基盤が小さいほど、力量の高いコーディネーターが公的につなぐより、地方公務員を含むプライベートなネットワークの形成を先行する方が、圧倒的に近道である。
- ・ 鍵のひとつは「高校のPTA役員会」。教職員・地方公務員・地元諸団体役職者が私的に接触できる貴重な場である。



提 言

1. 「グローバル化や地方創生に対応できるよう、課題発見・解決能力を向上させる」という上位目的をより十全に達成したいという立場から、大学入試改革等とも整合的で、より合理性や実効性の高い政策の実現に必要な手立ての実装につき、関係する部署や会議(教育課程部会や高大接続システム改革会議等)に対して、当部会から申し入れを行う。具体的には、
 - ア) アクティブラーニングを、学校と地域を俯瞰する視野や生涯学習的な視点に基づいて導入する。
 - イ) 「幼少期の遊び」に遡って手立てを講じられるよう、首長部局等との協働を推進する。
2. 学校と地域の協働につき、総務省に対して、地方公共団体の参画支援を要請する。

－ 補 足 －

○ コミュニティ・スクールとの関係

- ・ 地方創生の文脈において、地方衰退の一因として「地域の将来を担う次世代の育成について地域の当事者意識や能力が低下した」点を指摘できる。そのため今後は、「地域のために育成すべき人物像や方法」について地域の側が当事者性を十分に回復した上で、「学校が育成する児童生徒像や方法」と摺り合わせていくことが必要。
- ・ 両者を摺り合わせる協議の場として学校運営協議会を機能させる道が考えられる。特に、都道府県立高校と地元市町村との間において両者は決定的に乖離しており、それが地域衰退を招来していることから、地域の持続可能性を高める上で、都道府県立高校にこそ学校運営協議会が必要、ということができる。

○ 学校支援地域本部との関係

- ・ 本稿で示した通り、高校のキャリア教育を支援する土台として発展させるべき余地が大きい。

○ 機関や団体の連携を促進する際の手立てや留意点

- ① 連携を予定している機関等の関係者と、縁をたどって私的に接触し、先方機関等との間にプライベートなネットワークを構築する。先方で内部調整が進んだ後、公的に接触する。
- ② 「連携しない損失」「連携する恩恵」が伝わるよう、各者に事業の全体像を提示する。
→ 小中学校と地域の連携は、連携相手(地域)の損失や恩恵が伝わりにくい。
- ③ 高度な技能をもつコーディネーターやファシリテーター不在でも運営できる仕組みを提示する。

志ある若者が自然に育つ地域環境

社会に出る時の意識

○ 何かのため、誰かのため、夢と志を大切に生きていきたい！

- ・ 自分は組織や社会にとって大切な一員になれる。(組織や社会に一体感がある。)
- ・ 難しい問題でも、仲間を募って協力しあえば、きっと解決できる！
- ・ 自分は微力だが無力ではない。自分が働きかけた分だけ世の中は良くなる。
- ・ 誰かのための自分。困っている人がいたら、助けになろう。
- ・ 何か困った時には、きっと誰かが助けてくれる。希望を持っていこう！
- ・ 自分を育ててくれたのは郷土。力をつけて恩返しをしていこう。
- ・ 学べば学ぶほど、世界や可能性が広がって楽しい！

面接等で真価を発揮。次々とチャンスを与えられ、加速度的に実力向上

中学校を卒業する時の意識

○ 大人になった自分をイメージするとワクワクしてくる。思いきり頑張るぞ！

- ・ まわりから一人前と認められて嬉しい！ やっと自分も地域の一員になれたんだ！
- ・ お世話になった地域の方々から祝福されて感激だ！ 頑張って期待に応えていこう！
- ・ 大人と一緒にする活動は、とても楽しい。(身近な大人に親近感や信頼感がある。)
- ・ 自分も早く大人社会に仲間入りして、広い世界で自分の力を試してみたい。
- ・ 働きかけたら地域の人たちは応えてくれた。これからも働きかけていこう。
- ・ 自分は地域からお世話になってきた。自分にできることは積極的に関わっていこう。
- ・ 人様に喜ばれると嬉しくなる自分がある。世の中「誰かのための自分」なんだ！
- ・ 進学したら色々なことに挑戦し、世界を広げ、学びを深めていこう！

人づくりに対する当事者意識が十分な地域に住む家族が受ける恩恵

小学3の体験

○ 身近な大人と豊かな“共汗&共感”体験を積んでいる。

- ・ 大人として扱われ、可能性を信じてもらえる。
- ・ 多様な価値観、幅広い年齢層の集団に混じって過ごす機会が保障されている。
- ・ 大人が「子どもを見守る」「堂々たる姿を示すべき」存在として関わっている。
- ・ 子どもは「大人の後ろ姿から見習うべき」存在として位置づけられている。
- ・ 夢や志の実現にむけて本気で生きている大人と時間を十分に共有できる。
- ・ 身近な大人(教師・保護者・地域)に協調姿勢。子どもは安心して心を開ける。
- ・ 共通の目標に向かって、大人と一緒に何かを創りあげたり、成し遂げたりできる。
- ・ 子どもの声に耳を傾け、挑戦を後押ししてもらえる。子どもの提案が活かされる。
- ・ 地域のよさや楽しさを体感し、理解を深める機会が豊富にある。
- ・ 本物(自然・文化・芸術・人物等)にふれる体験を幼少期以上に積んでいる。
- ・ 素朴な感動を原動力とする学びに夢中になれる。(「豊かな遊び」の徹底追求)
- ・ 問題意識から出発し、問題意識を深める学びが尊重される。

志ある若者が育ちにくい地域環境

社会に出る時の意識

- オカネのために働き、自分のために消費していこう！ (でも実力がないから低収入)
- ・ 組織や社会は自分の外にある世界だ。(組織や社会には疎外感がある。)
- ・ 難しい問題を解決するのは誰かの仕事。そんなの自分は関係ない。
- ・ 自分は無力。何かしたところで、組織や社会は変わらない。
- ・ 自分のための誰か。他人のために自分の貴重な時間や労力を使うのは損。
- ・ 何か困っても、誰も助けてくれない。オカネと保険だけが頼み。
- ・ 地域は自分を束縛するだけの存在。運悪く役が当たったら、適当にやりすごそう。
- ・ 勉強とは点取り作業。何か得することでもなければ、もう勉強なんかやりたくない。

↑ 点数競争に巻き込まれやすく、誘惑にも負けやすいので、管理に更なる出費

中学校を卒業する時の意識

- 気ままに、無難に、楽しく生きていければよい。
- ・ 夢？ …どうせ無理だし、みんな「現実」って言うし。だから、夢とは楽しみのこと。
- ・ 勉強？ …やりたいことのため、点数を取れるよう、塾で言われた通りにやる作業。
- ・ 仕事？ …安定した職種に就いて、ノルマだけ果たして、オカネを貰えれば上等。
- ・ 大人？ …全然イメージできないし、何の魅力も感じない。関わりたくない集団。
- ・ 地域？ …何それ？ 何かしてくれただけ？ (思い出や愛着^{かけら}は欠片もない。)
- ・ 目にする大人は自分の都合ばかり優先している。自分も将来、そうすればいいんだ。
- ・ 社会や大人は私たちに無関心。だったら、社会や大人に「関係ない」で良いよね？
- ・ 色々な役は不運な人に押しつければよく、自分から関わる必要など全然ない。

↑ 人づくりに対する当事者意識が希薄な地域に住む家族に及びやすい弊害

小学3の体験

- 大人の都合で実社会から隔離され、心に蓋をして過ごしている。
- ・ 子ども扱いされ、可能性や挑戦は頭から否定されている。
- ・ 大人が「子どもを管理する」「手取り足取り世話を焼く」存在として関わっている。
- ・ 子どもは「大人の指示を待って従順に行動すべき」存在として位置づけられている。
- ・ 子どもの声には耳を傾けてくれない。大人の都合でルールに乗せられる。
- ・ 日ごろ目にするのは「自分さえ」「今さえ」という大人の後ろ姿ばかり。
- ・ 身近な大人(教師・保護者・地域)の思いがバラバラ。子どもも自分の都合を優先。
- ・ 大半の時間を、地域とは隔絶された閉じた世界(塾・スポーツ)で過ごす。
- ・ 「子どもの意志や工夫では何もできない」という前提で学習塾に放り込まれる。
- ・ 親が娯楽を地域外や商業施設ばかりに求め、地域は「通過するだけの空間」。
- ・ 塾やスポーツで多忙になったのを理由に、本物体験が著しく阻害されている。
- ・ 周囲の大人が「遊び」と「学び」を対極に位置づけて語る。
- ・ 上位校への進学を目的として入試に特化した「学習作業」ばかりが強調される。